

ザンビア南部州におけるグエンベ・トンガのウシ飼養 —2008年度調査報告—

岡本雅博
総合地球環境学研究所

要旨

本報告は、2008年に実施したグエンベ・トンガのウシ飼養に関する現地調査の概要である。調査の結果、グエンベ・トンガがウシ飼養を受容した時期は比較的近年であること、現在では婚資はウシと現金になってきていること、ウシ飼養は牛耕に使用されるなど農耕に有用であるが、放牧地と耕地とのあいだには競合関係がみられること、ウシは基本的には個人が所有するが母系親族集団が共有する場合があることなどが明らかになった。

1. 調査の目的

ザンビアの南部州は、同国のなかでもウシ飼養のもっとも盛んな地域のひとつである。図1に示したごとく、南部州は西部州、東部州についてウシの頭数が多い地域となっている¹。南部州を居住域とするバントゥ語系民族集団のトンガ (Tonga) は、文化的・言語的にみて、南部州の高原地帯に住む高地トンガ (Plateau Tonga) とザンベジ川中流域のかつてのグエンベ渓谷周辺に居住するグエンベ・トンガ (Gwembe Tonga)²に大別できる。ウシ飼養に関していえば、高地トンガは、同じく南部州を居住域とするイラ (Ila) と並んでザンビアでも名高いウシ持ちの民族として知られるが (Colson 1951)、グエンベ・トンガではウシ飼養はそれほど盛んではなく、近年になって普及した (Cliggett 2005)。

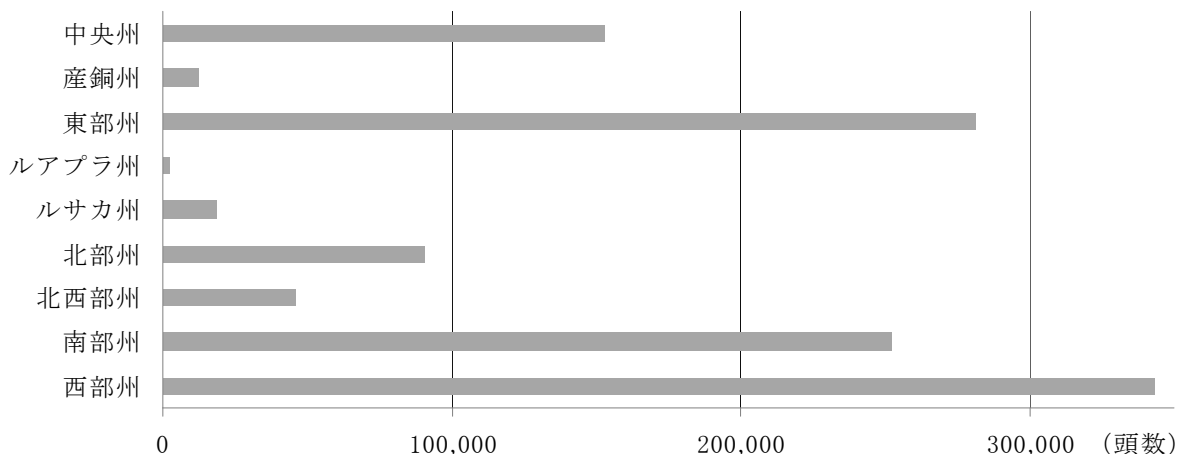


図1 ザンビアにおける州ごとのウシの頭数 (2002年)

(Central Statistical Office 2004 をもとに作成)

¹ 西部州はロジ (Lozi)、東部州はチェワ (Chewa)、ンゴニ (Ngoni) などの民族集団の居住域となっており、それぞれウシと農業とを組み合わせた生業形態がみられる。

² グエンベ・トンガは、渓谷トンガ (Valley Tonga) と呼ばれる。

こうした状況を踏まえたうえで、現在のグエンベ・トンガにおけるウシ飼養の実態を把握し、そしてその変遷を明らかにすることを目的として、現地調査を実施した。

2. 調査の概要

現地調査では、2008年11月から12月にかけて、ザンビア共和国の首都ルサカおよび南部州において政府諸機関での家畜飼養に関する文献資料の収集および聞き取り調査、ならびに調査地域の概観調査、農家世帯での聞き取り調査を実施した。おもな調査内容は以下のとおりである。

(1) 首都ルサカ

- ① 政府中央統計局 ザンビアの家畜飼養に関する統計資料の収集。
- ② ザンビア大学 旧ローズ・リヴィングストン研究所（現ザンビア大学社会調査研究所）発行の文献資料の収集。

(2) 南部州

- ① 農業省獣医畜産局南部州事務所（チョマ県） 南部州における家畜飼養の概況と疾病に関する資料の収集および職員への聞き取り。
- ② 農業省獣医畜産局シナゾングェ県事務所 南部州シナゾングェ県における家畜飼養の概況と疾病に関する資料の収集および職員への聞き取り。
- ③ チョマ博物館 トンガの歴史・文化に関する民族学的展示の見学および文献資料の収集。
- ④ シナゾングェ県広域概観調査 車輛を用いて、調査サイトA、B、C³のほか、カリバ湖、マンバ炭鉱、カンダブゥエ炭鉱などの概観調査。
- ⑤ 調査サイトA⁴に位置するシアネンバ村（シナゾングェ県）に滞在し、同村および周辺村の農家を訪問し、家畜飼養に関する聞き取りおよび参与観察。

3. 調査結果の概要

現地調査の結果明らかになった諸点のうち、特にサイトAにおける家畜飼養に関する事項を以下に列挙する。

- (1) グエンベ・トンガにおいてウシ飼養が盛んとなったのは1950年代のカリバ湖建造にともなう強制移動の以降である。それまでのグエンベ渓谷では、ツェツェバエの被害があったこともあり、ウシの数は少なく、主要な家畜はヤギであった。
- (2) ヤギからウシへという飼養する家畜種の変化は、婚資（*kusela*）の変遷に如実にあ

³ 南部州の高地に位置するチョマ県からカリバ湖岸の低地であるシナゾングェ県までは、農業生態的・社会経済的に多様であるため（櫻井2008）、レジリアンス・プロジェクト（総合地球環境学研究所のプロジェクト「社会・生態システムの脆弱性とレジリアンス」）では、カリバ湖岸の平坦地にサイトA、高地に至る斜面地・丘陵地にサイトB、高地にサイトCと、3つの調査区を設定している。

⁴ サイトAを今回の主たる調査地とした理由は、サイトAがサイトB、Cと比較してウシの飼養頭数がもっとも多いとみられたからである（櫻井2008）。

らわれている。すなわち婚姻に際して、夫方親族から妻方親族に支払われる婚資は1950年代まではヤギと現金が主流であったが、現在ではウシと現金（場合によってはあわせてヤギも）へと変化した。

- (3) 飼養されているウシの利用法として、もっとも重要なのは牛耕に用いることである（写真1）。しかしながら、去勢ウシの数が足りない世帯も多く、そうした世帯では雌ウシを牛耕に用いるケースもみられる。獣医局のスタッフによれば、雌ウシを牛耕に使用する例はザンビアでも稀であるという。



写真1 トウモロコシ畑の牛耕



写真2 収穫後のトウモロコシ畑でのウシの放牧
(点在する樹木はアカシア・アルビダ)

- (4) ウシの放牧域や飼料は季節的に変化する。すなわち集落周辺のブッシュでの放牧のほかに、乾季のはじめになるとトウモロコシやワタの収穫後の耕地で刈り跡放牧がおこなわれ、また6月から8月頃には、肥料効果を意図して耕地に人為的に残されたマメ科高木のアカシア・アルビダ (*Acacia albida*) の実が飼料となる（写真2）。しかしながら、放牧地の面積および飼料の絶対量は十分ではないとみられ、そのことが人びとのミルクの利用の制限要因となっていると考えることができる。

- (5) 農耕がおこなわれる雨季のあいだは、ウシやヤギによる作物への食害が大きな問題となる場合が多い。そのため雨季の期間には、耕地の周囲をアカシア・アルビダなど有棘樹の枝を張りめぐらせて、家畜除けの囲いを作っている。
- (6) また家畜の耕地への侵入を防ぐために、村長のイニシアチブのもと、村（集落）を単位として、家畜の放牧時には牧童の同行を義務づける時期を設定している。その時期は、トウモロコシの播種が始まる 11～12 月頃から、ワタの収穫が終了する 7 月下旬までである。
- (7) ウシを食用のために屠殺することは、葬式の場合などを除いては、ほとんどない⁵。ウシを現金に変えたいときは、知人に売却するか、もしくはルサカなどから来た買い付け人に売ることが多い。いっぽうヤギは、食用のために屠殺することも多く、またシナゼゼの町にはヤギの屠殺場が設けられている。
- (8) たいていの場合、ウシは個人によって所有されている。しかしながら婚資として妻方に贈与されたウシは、妻の母系親族集団⁶によって共有されることがある。そのようなウシは、「親族のウシ」(*ngombe lya mugowa*) と呼ばれ、母系親族のなかで何かあつとときに処分されることがある。

4. むすびにかえて

今回の現地調査で、グエンベ・トンガにおけるウシ飼養の概況を把握することができた。これまでレジリアンス・プロジェクトにおいて、ウシ飼養についてのインテンシブな調査は実施されてはこなかった。しかしながら、現在のグエンベ・トンガの生業および社会生活みる限り、ウシ飼養のしめる比重は決して小さいとはいえない。本プロジェクトの課題であるグエンベ・トンガの社会がもつ「レジリアンス」の解明にむけて、ウシ飼養の実態解明にむけたさらなる調査をすすめてゆきたい。

参考文献

Central Statistical Office. 2004. *Agricultural and Pastoral Production Structural Type and Post harvest Data for Small and Medium Scale Farmers*. Lusaka: Central Statistical Office.

Cliggett, Lisa. 2005. *Grains from Grass Aging, Gender, and Famine in Rural Africa*. New York: Cornell University Press.

Colson, Elizabeth. 1951. The Role of Cattle among the Plateau Tonga. *Human Problems in British Central Africa / The Rhodes-Livingstone Journal 11*.

櫻井武司 2008 「ザンビア南部州における農家家計の資産保有状況－調査対象村の 2007 年度センサス結果から－」『社会・生態システムの脆弱性とレジリアンス－平成 19 年度 FR1 研究プロジェクト報告』総合地球環境学研究所

⁵ 高地トンガでは成女式 (*nkolola*) のときにウシを屠殺する習慣がひろくみられるが、現在のグエンベ・トンガでは成女式は一般的ではない。

⁶ 母系制の社会システムをとるトンガでは、ムゴワ (*mukowa*) と呼ばれる母系クラン・リネージの存在が認められる。